

# 「私の花は実である」

—— エックハルト思想のマリア論 ——

田 島 照 久

## 序

本論文は、ドイツ・ミュステイクの代表的思想家マイスター・エックハルト (Eckhart von Hochheim ca.1260-1328.1.28) がドイツ語著作中で繰り返し説いている「魂の内における神」の「子」の「誕生」(Gottesgeburt in der Seele) の教説を、キリスト教伝統のマリア論の観点から再解釈することを試みるものである。

東方教会由来の熱烈な民衆のマリア崇敬 (Maria Verehrung) は、マリアに関する聖書記述の少なさから、文学的創作の性格を強く有する聖人伝説『ヤコブ原福音書』(二世紀後半成立) の強い影響の下、説教や図像を通じて民衆の心に深く浸透し、カトリック教会のマリアをめぐる教義である「神の母の称号」(theotokos) 「聖母被昇天」(Assumptio Mariae) 「無原罪の宿り」(Immaculata Conceptio) 成立の原動力となった。

「私の花は実である」

十字架の下に福音史家ヨハネとたたずむマリアを描いた「悲しみの聖母」図像の典拠は聖書ではなく、ヤコポーネ・ダ・トーディ (Jacopone da Todi 十三世紀) の書いたと伝わる「スターバト・マテール」(Stabat Mater) と題された詩である。後年ジョスカン・デ・ブレン (Josquin des Pres 1445-1521) とパレストリーナ (Giovanni P. Palestrina 1524-1591) が曲をつけたのに倣って A. スカルラッティ (Alessandro Scarlatti 1660-1725) 、ベルコレーズ (Giovanni B. Pergolesi 1710-36) 、ハイデン (Franz Joseph Haydn 1732-1809) 等がそれに続いた。ロマン派時代にはロッシニー (Giacchino Rossini 1792-1868) やヴェルディ (Giuseppe Verdi 1813-1901) などにドヴォルザーク (Antonin Dvořák 1841-1904) などがこぞつこの詩に曲をつけるなど中世以来民衆に深く浸透した詩である。

処女マリアの懐胎は「受胎告知」として福音書に取り上げられている数少ないマリア記述の一つであるが、ドイツ、ヴェルツブルク市のマリア聖堂の北側入り口上方には、注目すべき「受胎告知」の

浮き彫りがある。天上に坐す父たる神の口から一本の管が「マリアの耳」まで伸びているのである。しかも耳元で鳩の形に変形した管の上を幼児イエスが母親を指して滑降している浮き彫りである。神の子の受胎はマリアの耳を介して行われたという理解は古代末期のシリアの神学者エフライムにまでさかのぼるものであり、旧約のエヴァの耳から死が世界に入ってきたように、マリアの耳からは命が世界に入ってきたとする伝統的解釈が背景にある。<sup>(2)</sup>

「神の〔子の〕母」(テオトコス)という母としての最高の称号を受け、同時に我が子の死を面前で経験した「悲しみの聖母」(マーテル ドロローサ)でもあるマリアは、民衆のあらゆる苦しみと願望とを託した祈りを受け止め、神に取り次ぐ代願者とされたのである。

マリア崇敬は中世キリスト教世界の実質的信仰内実を形成していったと言っても過言ではないであろう。夥しい数のマリア祭壇やマリア巡礼教会が建立され、夕べの祈りが日毎マリアに捧げられた。本論は、きわめて思弁的であるといわれるエックハルトの救済論もその根底にマリア論の枠組を持っていることを明らかにしようとするものである。すなわち、民衆の熱狂的なマリア崇敬を救済論的観点から人間精神の問題として説き直そうとしているエックハルトの意図を、彼の論旨に則して明確に浮かび上がらせることを本論文で試みたいと思う。

とくに「ドイツ語説教二」は、聖母マリアについての直接的言及

はないものの、聖母マリアの「処女懐胎」の伝統的理解を下敷きにして「魂の内における神の子の誕生」のテーマを扱っている「精神のマリア論」と呼ぶにふさわしい典型的な説教といえるものである。エックハルトはマリアを人間精神すなわち人間の魂 (Seele) に準え、「マリアの処女性」を「魂の離脱した方」ととらえる。マリアの「処女懐胎」とは、離脱した魂の内に神の子が誕生する救済論的事態としてエックハルトは説くのである。まずは「精神のマリア論」の前提となる、「神の受肉」に対するエックハルトの理解から見えていくことにしたい。

### 一 テオオシス(人間神化)に向けた受肉の 目的論的理解

「実に、この方(ロゴス)が人となられたのは、私たちを神とするためである<sup>(3)</sup>」と語るアタナシオスに代表されるギリシア教父達のテオオシスに向けた受肉の目的論的理解は、およそ千年後のエックハルトにおいても以下引用文前半のような言表として確認することができる。

神はなぜ人となったのだろうか(「受肉の意味筆者」)。それはわたしが同じ神として生まれるようになるためである(「魂の内における神の子の誕生筆者」)。わたしが全世界と一切の被造物と

に死に切るために「魂の離脱筆者」、そのために神は死んだのである〔十字架上の死の意味筆者<sup>(4)</sup>〕。

「神はなぜ人となったのか」(Qua Deus homo?) という伝統的な「受肉の意味への問」が立てられ、それに答えて「それはわたしが同じ神として生まれるようになるためである」とその理由が述べられている。エックハルトにおいてはこの受肉の目的論的解釈の枠組みで語られたテオシスは「魂の内における神〔の子〕の誕生」の教説としてドイツ語説教・論述の内盛んに展開されているものである。

さらに引用後半では、キリストの十字架上の死の理由が、同じ目的論的解釈の枠組みで我々各人における精神の死、すなわち「魂の離脱した在り方を成就すること」にあると語られる。エックハルトの思惟連関においては、離脱した魂の内神の子の誕生が生起するとされるので、<sup>(5)</sup>「魂の離脱した在り方」が「イエスの十字架上の死」を意味するならば、「魂の内における神〔の子〕の誕生」は「受肉」の意味にとどまらず、また「復活」を意味することにもなる。それゆえ「復活」としての「魂の内における神〔の子〕の誕生」は「魂の離脱」という「自己及び世界に対する死」を介して「神の子」である「目覚め」の生起としての精神の「復活」をも意味するものであるといえる。

エックハルトの思想において特徴的であるのは、いま見てきたよ

「私の花は美である」

うに目的論的枠組みの内に置かれた、範型論的(＝範例的)アナログ思考とでも呼ぶべき思惟パターンである。

それでは「離脱」とはどのような魂の在り方であるのか以下見ていくことにしたい。

## 二 離脱 (abgescheidenheit) の教説と 「わがものにすること」(eigenschaft)

エックハルトはドイツ語論述『離脱について』の冒頭部分で次のように述べている。

わたしが真剣に全力を傾けて捜し求めたのは、どれが最高にして最善の徳 (Tugend) であるか、すなわち、人を神に最もよく、最も近く結びつけ、恩恵 (Gnade) により人を神の本来の姿と同じものにするのできるような徳とはどのようなものであるのか、神が被造物を創造する以前、人と神との間にいかなる区別もなかったとき、神の内にあるその自分自身の「原」像 (Bild) と最も近くなるためにはどんな徳によればよいのかを捜し求めたのである。わたしの知性がなし得るかぎり、認識し得るかぎり、あらゆる書物を徹底的に探求した結果、わたしがそこに見つけたのは、純粋な離脱 (abgescheidenheit) はあらゆる徳を凌ぐというところに他ならなかった。<sup>(6)</sup>

恩恵により人を神の本来の姿と同じものにする事ができるような徳こそが離脱であるとされている。さらにエックハルトにおいて特徴的な語り方である「神が被造物を創造する以前、人と神との間にかなる区別もなかったとき」という境位が持ち出される。

『ヨハネ福音書注解』ではこの場合は「始原」(principiū)と名付けられ、神が在り(神的知性認識の現実態として存在し)、三位のペルソナが発出し、万物が創造されるというトリアーデ構造を有する永遠の場ということになる。<sup>(8)</sup>この「始原」(principiū)の場は『創世記注解』では「永遠の第一の単一なる今」(primum nunc simplex aeternitatis)<sup>(9)</sup>と名付けられている。さて、エックハルトの語るあらゆる徳を凌ぐとまで評価された離脱とはどのような在り方かという意外なほどシンプルで道德的な在り方としてつぎの様に語られている。

説教をするときには、私はいつも離脱(abgescheidenheit)について語ることにしている。つまり人間は自分自身とすべてのものとの囚われない(ledig)ようになる(werden)ということである。<sup>(10)</sup>

すなわち、「離脱とは人間が自分自身とすべてのものとの囚われないようになる(ledig werden)ということである」と説かれ、「囚

われないようになる」ということが自己自身、およびすべての事物という二つの観点から語られている。エックハルトはこの解消すべき自己という事態をeigenschaftという語を以って語っている。

クヴェイントはこの中高ドイツ語 eigenschaft を Ich-Bindung (我—繫縛、我執)と現代ドイツ語訳している。クヴェイントは我執から離れ被造物にとらわれなくなるのが離脱という精神の在り方であると解釈していることになる。

この語をここでは「我がものとする」と訳すことにしたい。eigenschaftとは中世の法律用語として自己の所有である固有財 eigentum と関連しているからである。<sup>(11)</sup>離脱とは自分自身を「我がものとする」という自己の在り方から切り離された在り方ということになる。

どういうことであろうか。自分であるという自己認識はこの世界で出会う自分ならざるもの他者他物を介して自己弁別的な自己同一意識としてもたらされるので、自分自身を我がものとするという在り方は、自己同一的意識の成立に関わる事態が問題となっていることになる。

わたしがひとりの人間であるということ、そのことは他の人間もまた同様であり、わたしが見たり聞いたり、食べたり飲んだりすること、これもまた動物でもなすことであるが、しかしわたしであること、このことはわたし以外のだれにも属すことはない、とエックハルトは語る。<sup>(12)</sup>エックハルトが言うように通常、「わたしである」

という事は、わたしにしか属さない事態であり、わたしとは自己の固有的な (eigen) 所有者であるという確信であることになる。しかし「わたしが有る」、「わたしが存在している」という事態に関しては事情が異なると言わざるを得ない。

わたしも他の人間も動物も共に存在していることに変わりはないからである。この存在の側面をどう考えるかが問題とされていると言える。

### 「被造物の無」の教説

エックハルトには、「被造物の無」の教説として有名な次の言葉が残されているが、この言葉の前半は、一三二九年三月二十七日付け教皇ヨハネス二十二世の教書『主の耕地につ』(In agro dominico) において異端的言説(第二十六条)として断罪されたものである。すべての被造物がひとつの純然たる無であるならば、神の創造の業が否定されることになることとされるからである。

すべての被造物はひとつの純然たる無 (in inter nihilo) である。それが価値の低いものであるとか、そもそも何かであるといっているのではない。それらはひとつの純然たる無である。存在を持たぬもの、それは無である。すべての被造物はいかなる存在も持たない、というのもそれらの存在は神の現存にかかっているからである。神がほんの一瞬たりともすべての被造物に背

を向けるならば、それらは無に帰するであろう。<sup>(13)</sup>

エックハルトは、神を知性認識している純粹現実態にとらえ、今ある一切の存在するものはまさに今、神によって在らしめられているとする点ではスコラ学一般の理解と変わりはないが、エックハルトの場合、わたしが存在するその存在はわたしに分有された存在として、少なくとも生きている間はわたしの所有に託されているとする一般的な理解とは異なり、瞬間瞬間のこの今に神によって無から創造され、そのつど神から貸し渡されているものととらえる。

それゆえに個々の被造物を存在せしめているその存在はだれのものかといえば、借財という観点に立てば、借り受けている個々の被造物のものではないことは明らかである。その意味では、自己の存在を固有財 (eigentum) として自分自身が所有していないという意味では、個々の被造物は純然たる無 (in inter nihilo) であるが、しかし神からの使用貸借 (Leihe) 関係によって一切の被造物は現在に存在していることになる。しかし、神がほんの一瞬たりともすべての被造物に背を向けるならば、それらは無に帰するのである。

一切の被造物が今存在しているのはその存在を今神から借り受けているからであり、一切の被造物の、その被造物固有な所有性という観点から言うならば純然たる無と言うべきなのである。

これが、異端的言説と断罪されたエックハルトの主張の意味するところであるといえる。つまり「わたしであること」の内に「わた

しが存在している」ことを回収してしまい、私が私の存在の固有な所有者として自己認識を成立させることは、神の所有である存在を我がものにしていくことになり、そのような自己の在り方が eigenschaft 我がものとする<sup>(14)</sup>ことと呼ばれた根本事態と理解できるのである。

つまりこのような自己の存在認識の無知からなされる私たちの行為は、たとえ善き業とされる徹夜の祈り、断食さえも eigenschaft 「我がものとする」という自己の在り方に基づく限り否定される。

りっぱな<sup>(15)</sup>ことであると思ひ、我がものとする<sup>(16)</sup>こと (mit eigenschaft) 贖罪の行や外見だけの修練をつんでいるような一連の人たちがいる。このような人たちは神の真理についてはほんのわずかしら知ることがないことを、神よ憐れみたまえ。これらの人たちは外見からは聖なる「者」と呼ばれるが、しかし内から見るならば「愚かな」ロバである<sup>(14)</sup>。

すなわち我がものとする<sup>(17)</sup>こと eigenschaft にとらわれなくあること、離脱した状態とは、われわれの存在そのものが神から貸し渡されている借財であるという根本智、すなわち真の知恵を得ている確固たる状態ということになる。

それゆえ、真の離脱とは、鉛でできた山が少々風の風にはびくともしないで不動であるように、襲いくるあらゆる愛や悲しみ、名誉や、

恥辱や、誹謗に対して、精神が不動であることとされるのである。それゆえ離脱という自己の在り方は精神の動揺のない平安な在り方であり、離脱は知恵を得た精神の不動性を語るものと理解される。

以上のように、神から貸渡されているわたしたちの存在に基づいてなされるいかなる善き業も、個々人の固有の功德・功績 (meritum) ではありえず、神の恩恵によるものとするならば、善き業と引き換えに神の恩恵を求める者は、相手のものを相手に売りつけようとする「商人的取引」<sup>(16)</sup>として否定されることになる。

### 三 精神のマリア論

#### 聖書の典拠箇所

聖母マリアの処女懐胎に関しては、「マタイ福音書」に、夫ヨセフに対して主の天使が夢で語った言葉として次のように記されている。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によつて宿つたのである」(マター・十九)。さらに、「このすべてのことが起こつたのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」(マター・二十二)として次に「イザヤ書」(七・十四)の言葉を引く。

「見よ、おとめが身ごもつて、男の子を産む。その名は、インマヌエルと呼ばれる」。この名は、「神は我々と共におられる」

という意味である（マター・二十三）。

「イザヤ書」のヘブライ語原文では、「若い女」(‘alma) が身ごもるとなっているが、マタイはこの語をギリシア語の「七十人訳聖書」に従って、「処女」(parthenos) が身ごもると訳している。さらに、「ルカ福音書」(一・二十六―三十八)では、天使ガブリエルによって処女マリアがイエスを身ごもったことが告げられる有名な「受胎告知」の場面がある。これらが処女懐胎の典拠とされる聖書箇所である。

#### エックハルトのマリア理解

エックハルトは先に指摘した、目的論の枠組みの内に置かれた範型的（＝範例的）アナロギア思考とでも呼ぶべき思惟パターンに乗せて、次のように神「の子」の誕生を解釈する。

マリアが神をまず初めに霊的に生んだのでなければ、神はけっして身体をもってマリアから生まれることはなかったであろうと、わたしは言うのである。……つまり、神がマリアから身体をもって生まれたことよりも、ひとりひとりの処女から、すなわちひとりひとりの善き魂から神が霊的に生まれることの方が、神にとってはいっそう価値のあることなのである。<sup>(17)</sup>

「私の花は美である」

まず神「の子」の霊的誕生が神「の子」の身体的誕生に優先されることが語られる。そしてその優先された、神「の子」の霊的誕生が範型 (Exemplar) として、処女であるマリアのアナロギアであるひとりひとりの善き魂から、神が霊的に生まれること (Imago) こそが神「の子」の霊的誕生が真に目的としたことである（目的論的枠組み）とされるのである。

すなわち、処女マリアからの神「の子」の誕生は、ひとりひとりの善き魂から神が霊的に生まれることのために出来たと説いているのである。

このモチーフを離脱の教説として展開している典型的なものが「ルカ福音書」第十章第三十八節「一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた」という箇所を扱った「ドイツ語説教二」である。

ここには聖母マリアは登場せず、登場するのはマリア・マルタ姉妹のマルタであるが、しかしそこで展開されているは「魂の内ににおける神の（子）の誕生」論であり、「精神のマリア論」とでも名づけるのが相応しいものである。この説教を手がかりに「離脱の教説」の解釈へと入って行くことにしたい。

しかしその前に、ここで展開されているテーマを一層明確に確認するための視座を得る目的で、「三日目にガリラヤのカナで婚禮があった」（ヨハ2・1）という箇所に対するエックハルトの解釈を『ヨハネ福音書注解』から採り上げてみたい。ここでは「三種の誕

生」が説かれている。

### 三種の誕生

エックハルトは誕生には三種あることを以下のように説明する。

それゆえに知らなければならないことは、三様の婚姻が区別されなくてはならないことである。第一は身体的な婚姻であり、これはこの世において父と母を持つのである。これらの婚姻についてここでは字義通りに、「婚礼が行われた」と書かれている。第二に、神とわれわれの本性 (natura) との間の婚姻がある。そしてこの婚姻は父を天に、母をこの世に持っている。これらについて、「言葉は肉になった」と書かれている。第三に、神と魂との間の婚姻がある。そしてそれらについて「そしてそれはわれわれの内に住むようになった」(ヨハ一・十四)と書かれている。それらの婚姻は父と母とをこの世に持つていないのである。<sup>(18)</sup>

エックハルトは婚礼を目的因に即して誕生と結びつけ、三通りの婚姻に対応させて三通りの誕生を区別している。第一の誕生における父母は字義の意味に則って父母ともにこの世のものすなわち被造物であるとする。

第二の婚姻は神性と人性との間の婚姻であり、父は聖霊であり、

母はマリアであることになるので父を天に、母をこの世に持つていと述べられている。これはロゴスの受肉(托身)であり、神人イエスの誕生を指していることになる。

さらに第三の誕生は神と魂との間の婚姻によってもたらされるとされている。注目すべきことはこの誕生をもたらす父母はともにこの世にない点である。この第三の誕生が「魂の内における神の〔子の〕誕生」を指していることは疑う余地はないであろう。

父はこの世にない父なる神であるが、ではいったいこの世にない母は誰であろうか。エックハルトは、この婚姻に値するものとなるためには、人間はすべての変化しうるものと被造的なものを軽蔑することによって、すべてのものを超えて行かなくてはならない<sup>(19)</sup>、とこの後で述べていることから、こうした在り方が先に見た離脱に相應することは明らかである。

すなわち第三の誕生におけるこの世にない母とは離脱という魂の在り方ということになる。そしてさらに、言葉が人間の本性を取った第二の結婚はわれわれが、神の子となりうることを教えるためであったと<sup>(20)</sup>、第二の誕生であるキリストにおけるロゴスの受肉を、第三の誕生である「魂の内における神の〔子の〕誕生」に対しての範型として位置づけているので、第二の誕生の母マリアは、第三の誕生の母である離脱の範型として機能していることがここから帰結されることになる。

ここでも「精神のマリア論」というコンセプトが確認されること

になる。

### 処女懐胎モチーフにおける「処女」

これより「ルカによる福音書」第十章第三十八節「イエスがある城 (castellum) に入るとマルタという女 (mulier) が、イエスを家に迎え入れた<sup>(21)</sup>」という箇所を扱った「ドイツ語説教二」をマリア論としての離脱の観点から見たい。この説教は同じ聖書箇所を扱った有名なマリア・マルタを題材とした「説教八十六」とは別の説教である。

この説教でまず気が付くことは、ラテン語ウルガータ訳聖書にはないドイツ語が訳として加えられていることである。

説教冒頭で、聖書に書かれてある章句をまずラテン語で読んだが、ドイツ語では次のようになるとして、「われわれの主イエス・キリストが、ある城に入ると、女である一人の処女に迎え入れられた」と訳している。「女である一人の処女に<sup>(22)</sup>」という意図的付加こそがこの説教の眼目をなしていると言える。処女とは、外から来るすべての像に、とらわれることのない (völlig) 人、その人がいまだ存在していなかったときのようにとらわれない人のことをいうのだ<sup>(23)</sup>とした上で、しかし、この世に生まれて、知性的な生活をおくるまでに成長した人が、すべての像にとらわれず<sup>(24)</sup>にありうるのかとみずから問う。そして次のような答えを提示する。

「私の花は美である」

もしすべての人類がいままでに受けいられてきたあらゆる像が、さらには神自身の内にあるあらゆる像が、わたしの知性の内に存在するほどわたしが知性的であったとしても、わたしが、我がものとする<sup>(25)</sup>ことなしに (âne eigenschaft) あれば、自由であり、行為を選択せず、時間的前後にも縛られることはなく、それらの像をわがものとする<sup>(26)</sup>ことによつて (mit eigenschaft) つかむことがなければ、またさらに、現在のこの今において、自由にしてとらわれなく神の意志に従い、不断にその意志を満たすならば、そのときわたしは、生まれる以前のわたしのよう<sup>(27)</sup>に、すべての像によつてもさまたげられることのない、真に処女 (おとめ) であることになるのである<sup>(28)</sup>。

すなわちどんな高度な所有状況にあつても、わたしが我がものとする<sup>(29)</sup>ことのない在り方で (âne eigenschaft) あればすべての像から自由であるとされている。すなわち神を求め<sup>(30)</sup>るために行為を選択したり、時間的な流れの中でそれらの像を我がものとする<sup>(31)</sup>ことがなければ、神自身の内にあるあらゆる像が、わたしの知性の内に存在していても、生まれる以前のわたしのように、すべての像によつてもさまたげられることのない、真に処女であることになる、とされるのである。すなわち、すべての像からの離脱は像そのものを捨て去るのではなく、その像を我がものとする私の在り方 eigenschaft から離れることを意味していることになる。

次の段落では、つづけて、真に処女の働くそれらのわざすべては、その人を処女のままにおき、最高の真理をさまたげることもなく、その人を自由たらしめるのであると述べられている。<sup>(25)</sup>つまり行為そのものが真理の指標となるのではなく、行為の主体の在り方が問われていることになる。贖罪の行や修練を積んでいてもこうした我がものとする自己[eigenschaft]から業を働く人は、先ほど触れたように、外見からは聖なる〔者〕と呼ばれるが、しかし内から見れば〔愚かな〕ロバである<sup>(26)</sup>とまで痛烈に非難している。ここで重要なのは、離脱に立つてなすわざのすべては最高の真理をさまたげることとはなという理解である。

#### 処女懐胎モチーフにおける「女」

エックハルトは続いて子を出産する母を意味する「女」について論を展開していく。

もし人がいつまでも処女のままであるならば、その人からはどんな実りも生まれてこない。人が実り豊かになるためには、女であることがどうしも必要なのである。「女」とは魂につけることのできる最も高貴な名前である。それは「処女」という名よりはるかに高貴である。人が神をみずからのうちに迎えることは善きことである。この受容性において人は処女であることになる。しかし神がその人のうちで豊かに実を結ぶことはさら

にいつそう善きことである。賜物が豊かに実を結ぶことこそが唯一、賜物への感謝となるからである。そのとき精神はイエスを父である神の内に生みかえす。感謝をあらわすこの生みかえすという行為において精神は女であるといえるのである。<sup>(27)</sup>

ここでは処女である離脱が神を迎える受容性として語られている。つまり実りをもたらず準備段階として実りに先だつのである。ここから離脱の捨て去るといふ過程的なダイナミズムが一般的な離脱教説の構造契機として理解されてくることになる。人が実り豊かになるためには、聖母マリアのように処女であると同時に女であることがどうしも必要であると語られ、賜物への感謝は唯一生み返すという行為によって果たされるとされている。

子の誕生によって魂は子となり、さらに子を生むという父の場に帰還する動性が、マリア論受容の観点から、すなわち子を生む母の観点を導入したことから語られているのである。このマリア論はそれゆえある意味でエックハルトの「突破の教説」をその射程にとらえる勢いを見せていると言えるであろう。

女であるこれらの処女たちはその永遠なる言を生む実にそれと同じ根底より、彼女たちは実り豊かに父と共に生むものとなるのである<sup>(28)</sup>とされ、イエスが彼女たちと合一し、彼女たちがイエスと合一して、父の心のうちで彼女たちはイエスと共に、ひとつの唯一なる一(ein einz ein)として、ひとつの純粹に透明な光として、輝きを放

つのであると<sup>(29)</sup>されている。

### 魂の内にある城

こうしたエックハルトの理解の構造を与えているものが、マルタがイエスを迎え入れた「魂の内にいる城」(ein bürgelein in der seele)である。エックハルトはこの「魂の内にいる城」にこれまで与えられてきた様々な名称を列記している。あるときは精神の護り(ein huote des geistes)、精神の光(ein licht des geistes)、火花(ein vünkelein)と言ってきたと語り、神が神自身の内で独り子を、そして魂の内で神の子を生むときの同じ力がこれであると語る。

こうした力としてあらわされているものは神的知性であり、また魂においては神から直接注がれた非被造的力でもあることになる。さらにこの城は一にして単純であり、神がそのペルソナのあり方で存在するかぎり、神自身でさえも、うかがい知ることができず、この唯一なる一なるもの(einic ein)は、あり方もなく、固有性もないと<sup>(34)</sup>されている。

ここにおいて神はあらゆるあり方も固有性もない単一なる一であり、その意味で、神は父でも子でも聖霊でもない、<sup>(35)</sup>と語られる。神が一にして単純であつてこそ、魂の城と呼ぶこの一なるものの内へ神は入り来たるのである、<sup>(36)</sup>とされる。

上記の言表からこの城とはすなわち神に関しては神性であり、神の根底であり、神の一性を指し示していることになるであろう。さ

らには魂の内にこの城があるということ、そしてこうしたこの城にはイエスが迎え入れられるということ、また父の心のうちで彼女はイエスと共に、ひとつの唯一なる一(ein einic ein)としてイエスを父と共に生むものとなることとされていることから、この城はまた神の根底と同定された魂の根底ということになるであろう。「神の根底はわたしの根底であり、わたしの根底は神の根底である」<sup>(37)</sup>。こうした多様な神に関する言説は、魂に関しては神の像(imago dei)という観点から語り出されていると考えられる。<sup>(38)</sup>

### 沈黙と言葉の到来

旧約聖書「知恵の書」の第十八章第十四節「沈黙の静けさがすべてを包むとき…」とされた箇所のエックハルトの注解を見ていくことにしたい。十四節から十五節に亘る聖書箇所は、「沈黙の静けさがすべてを包み、夜が速やかな歩みで半ばに達したとき、あなたの全能の言葉は天の王座から、情け容赦のないつわもののように、この滅びの地に下った」(十八・十四—十五)というものだが、この注解の中でエックハルトは沈黙の静けさがすべてのものを包まなければならぬのは、神である言葉が、精神のうちへと恩恵によって到来し、子が魂のうちで生まれるためであると説く。この「沈黙」の解釈がエックハルトの魂の離脱(abegescheidenheit)に関する教説に結び付けられて説かれてくるのである。なぜ沈黙の静けさがすべてのものを包まなければならないのか、その理由が以下説明さ

れている。

かなり込み入って論旨が展開されているが、論旨をまとめるとつぎのようになる。すなわち神においては、父から子の誕生はアリストテレス以来の4つの原因である、目的因、作動因、形相因、質料因のうち形相因だけが関与しているとされる。父も子も同じ神であるかぎり、子は父の形相的流出とされる。父からの子の誕生では、作動因と目的因は、(もちろん質料因も) 介在しないと伝統的に理解されていることが説明されている。

すなわち神における子の誕生が作動因や目的因によらないのであれば、魂の内においても、子の誕生にあたっては作動因と目的因の介在が、すなわち媒介 (medium) の一切が沈黙しなければならぬという論理である。

わたしたちにおける目的因や作動因の沈黙とは、恩恵を受け取る目的のために何事かをなすというわたしたちの行為、つまりその「功德・功績」(meritum) の一切の無効性を語るものなのである。

恩恵を受け取るためになすわたしたちの行為の一切が沈黙したとき、すなわち沈黙の静けさが魂を支配したとき、言い換えれば魂が離脱の場にあるときをはじめ、神的本性の一義的流出として、「神の子の誕生」が恩恵によって魂の内では生起するのであると説かれていくことになるのである。

離脱すべき自己の在り方をこうした「功德・功績」の観点から再度見直すところのようになるであろう。離脱すべき自己の在り方で

ある eigenschaft、すなわち我がものとする自己、私の存在を自己の所有に帰して我がものとし自己を立てその自己のなす功績を取引材料として、神の恩恵のためなら、つまり神の恩恵を我がものとするためなら善きこと(功德・功績)は何でも我がものとする者は、恩恵にはいかなる功德・功績も介在しえないことを知らない者であつて、外見からは聖なる「者」と呼ばれるが、しかし内から見ると「愚かな」ロバであることになるであろう。唯一の手立ては、こうした被造的手段の一切の放棄である。

神がある仕方だが人は、その仕方を手に入れるだけで、その仕方のうちに隠れる神をとらえることがない。しかし神を、いかなる仕方もしないが人は、神があるがままの姿でつかむのである。<sup>(39)</sup>

ただし注意を要することは、神的本性の一義的流出が生起する場、すなわち目的因や作動因の沈黙としての精神の離脱という在り方は、行為の「功德・功績」(meritum) の無効性を語るものであるということ、行為そのものの否定では勿論なく、「恩恵のためにくをなす」という行為の在り方が恩恵の働きの障碍となるとされることである。

離脱した精神の働くわざすべては、それゆえ最高の真理をさまたげることのないと語られたことはすでに確認したとおりである。そ

れゆえ、子と共に生きる人は命そのものであり、なぜということなしに (ane warumbe) 生きるの<sup>(40)</sup>であると離脱に立った行為の有する無理由性を語るのである。

### 私の花は実である

最後に本論文のテーマである聖母マリア理解の核心となっていた「ルカ福音書」(十・三十八)のエックハルトの解釈を再度彼の独自の思考パターンに則して取り上げたいと考える。

ウルガータ訳聖書箇所は「イエスがある城 (castellum) に入るとマルタという女 (mulier) が、イエスを家に迎え入れた」とあるところを、エックハルトは「われわれの主イエス・キリストが、ある城に入ると、女である一人の処女を迎え入れられた」とドイツ語で訳している点である。すなわち「女」(mulier)を「女である一人の処女」(ein jungvrouwe, die ein wip was)と言い換えているのである。このことは先にすでに指摘しておいた。

「女である一人の処女」の場合の「女」とは豊かな実りをもたらす者であると先の引用で語られていたように、産出する母を語るものである<sup>(41)</sup>ので、処女であり母であるというマリアの処女懐胎という理解がこの解釈の根底にあることは言を俟たない。「処女」とは準備としての受容性という不可欠の条件であるならば、「女」とはその実りであることになる。

### 「私の花は実である」

処女と女(母)との同一は原因と結果の一致として「私の花は実である」(Et flores mei fructusシラ書二十四・二十三)<sup>(41)</sup>という旧約のアウクトウリタスの指し示すところとなる。

これを精神におけるマリア論から見るとどうなるであろうか。精神において処女であることは、いかなる事物に対しても我がものとするという関係性から離れること、自分自身とすべてのもの<sup>(42)</sup>に囚われない (edict) ようになる (werden) という離脱の在り方を意味するものであった。その意味では否定道 (via negativa) という働き<sup>(43)</sup>の側面が処女性としての離脱ということになるであろう。しかし先にみたように離脱には、鉛でできた山が少々の風にはびくともしないで不動であるように、襲いくるあらゆる愛や悲しみ、名誉や、恥辱や、誹謗に対して、精神が不動であることという「不動性」という側面があり、この精神の不動性に関しては次のように語られている。

このこと「神は一なるものであり、変わることがないということ」は、わたしたちが自分自身の内で一なるものとなり、すべてのものから離れていなければならないということを言おうとするものである。つまりわたしたちはつねに不動にして、神と一つでなければならぬのである。<sup>(42)</sup>

すべてのものから離れているという離脱とは常に不動にして神と一

である境位として語られている。

神と一である境位とは先の否定道 (via negativa) という働き・生成の側面とは異なる、完成された状態・存在の側面を表すものである。すなわち、すべてのものに囚われなくなることを原因として、神と一つになる結果が招来される、というのではなく、すべてのものに囚われなくなることとは神と一つであることであるという原因と結果の一致が離脱という概念にはあるということである。「私の花は実である」という旧約の言葉が指し示している事態である。

原因と結果の一致という思惟の枠組み構造は、エックハルト神学の基礎を提供する「本質的始原論」(Die Lehre von principium essential) で説かれている事柄である。

「初めに神は天地を創造された」「初めに言葉があった」この初めは神が知性認識することによって在り、ペルソナの発出があり、万物が創造される同じ「始原」であると考えられる。

エックハルトはこの始原 (principium) は同時に終焉 (finis) であるとし、先の「私の花は実である」(Et flores mei fructus sim) 書二十四・二十三) という旧約の言葉を持って語るのである。

すでに紙幅も尽きたので詳細を展開することはかなわないが、始原と終焉の一致はまた原因と結果の一致としてエックハルトの思惟の随所に枠組み構造を提供しているのである。<sup>(33)</sup>

#### 注

(1) 「原福音書(プロットエウアンゲリオン)」とは福音書の原型という意味ではなく、「プロトス」とはここでは「以前の、先行する」という意味であり、正典福音書が記述しているイエスの誕生に先行する出来事を記述したものである。内容的には、「いとよ聖なる、神の母にして永遠の処女なるマリヤの誕生の物語」という副題が示すように、マリヤの誕生、神殿での養育、神託によるヨセフとの縁組、ベツレヘム近郊の洞窟でのイエスの出産が記されている。本書は初期キリスト教文学の代表的作品の一つであり、史的マリヤの資料にはもちろんないものであるが、キリスト教芸術のテーマ源泉として極めて重要な作品といえる。荒井献編 講談社文芸文庫『新約聖書外典』一、八木誠一「ヤコブ原福音書」解説、四七二頁参照。

(2) Klaus Schreiner, *MARIA Jungfrau, Mutter, Hersherin*, München/Wien, 1994, S.11f. 内藤道夫訳『マリヤ 処女・母親・女主人』二〇〇〇年、法政大学出版局、三十六頁参照。

(3) アタナシオス『言(ロゴス)の受肉』五十四(三) 小高毅訳『中世思想原典集成2 盛期ギリシア教父』平凡社、一三四頁。更につぎのようにも語られている。「神の子が人となったのは、アダムの子らを神の子らにせしめるためであった。(…) 実に、神の子は死をも味わった。(…) それは人の子らが霊に従って、彼らの父である神により、神の生命にあずかる者とせしめるためであった。それゆえ、キリストは本性によって神の子であるが、私たちは恩恵によって神の子らである」(Athanasius, *De incarnatione et contra Arianos* 8, Pg. 26, 996A-B)。

(4) エックハルトのテキストは *Meister Eckhart, Die deutschen und lateinischen Werke*, hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Stuttgart, 1936ff. を使用 (Deutsche Werke = DW, Lateinische Werke = LW)。節番号はこれに従い、DW, LW の巻、頁、行を示した。なお日本語訳はドイツ語説教・論述は田島編訳岩波文庫『エックハルト説教集』一

九九〇年を、またラテン語著作は中山善樹訳『エックハルトラテン語著作

集』I—V 知泉書館、二〇〇八—二〇一二年をまたトマス・アクィナス『神学大全』は創文社版を参照したが、訳文は適宜変更している。また聖書引用は日本聖書協会刊行の『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』の訳文を原則用いた。Pr.29. DWII, 84, 1-3: War umbe ist got mensche worden?

Dar umbe, daz ich got geborn wûrde der selbe. Dar umbe ist got gestorben, daz ich sterbe aller der wert und allen geschaffenen dingen.

- (5) Pr.56' DWI, 93, 6-94, 1: Ganc din selbes alzemåle ûz durch got, sô gât got alzemåle sin selbes ûz durch dich. Dâ disiu zwei ûzgânt, swaz dâ bibet, daz ist ein einvaltgez ein. In disem ein gebirt der vater sinen sun in dem innersten gequelle. (神のためにあなた自身から完全に離れよ。あなたが神はあなたのために自分自身から完全に離れるのを望む。この両者が完全に離れると神はあなたにあるのはひとつの単純な一である。この一はあなたのおいて、父はあなたの子を最内奥の泉に生かす)。

- (6) Von abegesch. DWV, 400, 4-6: welhu diu hoehste und diu beste tugent si, dâ mite der mensche sich ze gote allermeist und aller mehest gewûegen mûge und mit der der mensche von grâden werden mûge, daz got ist von nature, und dâ mite der mensche aller gîchehest stânde dem bîde, als er in gote was, in dem zwischen im und gote kein underscheit was, ê daz got die creatûre geschuof. Und sô ich alle die geschrit durchgrûnde, als verre min Vernunft erziugen und bekennen mac, sô envînde ich niht anders, wan daz lîteriu abegescheidenheit ob allen dingen si.

- (7) In Ioh. I.WIII, n.31, 25' 1-2: Vel apud ipsium, quia semper actu intelligit, et intelligendo gignit rationem: (ロトスに神は人にあや。あやなるは、ロトスは絶えずその現実態において知性認識し、そのよみに知性認識する)とて理念を生んでくるからである)。

- (8) 田島「マイスター・エックハルトの本質的始原論」、『中世における信仰と知』上智大学中世思想研究所編 知泉書館二〇一三年、三四五—三七一

「私の花は美である」

頁参照のトナ。

- (9) In Gen. I. n.7, LWI, 2, 65, 8-12: Rursus tertio principium, in quo deus creavit caelum et terram, est primum nunc simplex aeternitatis, ipsum, inquam, idem nunc penitus, in quo deus est ab aeterno, in quo etiam est, fuit et erit aeternaliter personarum emanatio. Ait ergo Moyses deum caelum et terram creasse in principio absolute primo, in quo deus ipse est, sine quolibet medio et intervallo. 田島「永遠の第一の単一なる今 (primum nunc simplex aeternitatis) —マイスター・エックハルトの永遠理解—」『トロンソーン』第九十八号、早稲田大学哲学会二〇一一年、一一—一二頁参照のトナ。

- (10) Pr.53, DWII, 528, 5-6: Swenne ich predige, sô pflege ich ze sprechene von abegescheidenheit und daz der mensche ledic werde sin selbes und aller dinge.

- (11) Lexet の辞書に現代ドイツ語には、Eigentum, Besitz (gegens. zu lehen), Eigentümlichkeit, Eigensinn, 所有物、所有心。

- (12) Vel Pr.28, DW, 63, 3-6  
(13) Pr.4, DWI, 69, 8-70, 4: Alle creatûren sint ein lîter niht. Ich spriche niht, daz sie kleine sin oder iht sin: sie sint ein lîter niht. Swaz niht wesens enhât, daz enist niht. Alle creatûren hant kein wesen, wan ir wesen swebet an der gegenwerticheit gotes. Kêrte sich got ab allen creatûren einen ougenblik, sô wûrden sie ze nihte.

- (14) Vgl. Pr.52, DWII, 489, 3-6: (Disen sin enverstât etliche lîute niht wol) daz sint die lîute, die sich behalent mit eigenschaf in penitencie und ûzwendiger ûebunge, daz die lîute vûr grôz âhtent. Des erbarne got, daz die lîute alsô kleine bekennent der götlichen wârheit! Dise menschen heizent heilic von den ûzwendigen bîden: aber von innen sint sie esel (...).

- (15) Von abegesch. DWV, 411, 12-412, 3

- (16) 「トロンソーン語説教」参照のトナ。邦訳は田島編訳岩波文庫『エックハルト

- (71) *Pr. 22*; DWI, 375, 10-376, 5. Ich spriche: und h (te Maria) niht von (rste) got geistliche geborn, er enw (re nie lipliche von ir geborn worden. (...)) Daz ist gote werder, daz er geistliche geborn werde von einer ieglichen junvrouwen oder von einer ieglichen guoten sêle, dan daz er von Mariâ lipliche geborn wart.
- (72) *In loh. n. 286*; LWIII, 239, 8-15: Sciendum ergo quod nuptiae distinguuntur triplices: primo corporales, et istae habent patrem et matrem in hoc mundo. De istis hie ad literam scribitur: *nuptiae factae sunt*. Secundo sunt nuptiae inter deum et nostram naturam, et istae habent patrem in caelo, sed matrem in hoc mundo. De quibus scribitur: 'verbum caro factum est'. Tertio sunt nuptiae inter deum et animam, de quibus scribitur: 'et habitavit in nobis'. Ista nuptiae non habent patrem nee matrem in hoc mundo, secundum illud infra loh. 14: 'princeps mundi huius in me non habet quidquam'.
- (73) Cf. *ibid.* n.292, 13-14
- (74) Cf. *ibid.* n.288, 12-13
- (75) Intravit Iesus in quoddam castellum et mulier quaedam, Martha nomine, excepit illum in domum suam.
- (76) *Pr. 2*; DWI, 24, 5-6: von einer junvrouwen, diu ein wîp was
- (77) Vgl. *ibid.* 24, 8-25, 2
- (78) *Ibid.* 25, 6-26, 3: Wære ich alsô vernünftic, daz alliu bilde vernünftliche in mir stüenden, diu alle menschen ie empfangen und diu in gote selber sint, wære ich der âne eigenschaft, daz ich enkeiner mit eigenschaft hæte begriffen in tuonne noch in lâzenne, mit vor noch mit nâch, mër: daz ich in diesem gegenwertigen nû vri und ledicstüende nâch dem liebesten willen gotes und den ze tuonne âne underlâz, in der wâhreit sô wære ich junvrouwe âne hindernisse aller bilde als gewærliche, als ich

- wasado ich niht enwas.
- (79) *Ibid.* 26, 5-6
- (80) Vgl. *Pr. 52*; DWII, 489, 3-6
- (81) *Pr. 2*; DWI, 27, 1-9: Daz nû der mensche iemer mē junvrouwe wære, sô enkærne keine vrucht von im. Sol er vruchtbeere werden, sô muoz daz von nôt sîn, daz er ein wîp sî. Wîp ist daz edelste wort, daz man der sêle zuo gessprechen mac, und ist vil edeler dan junvrouwe. Daz der mensche is got enpfæhet in im, daz ist guot, und in der empfendlichkeit ist er maget. Daz aber got vruchtbeerlich in im werde, daz ist bezzer: wan vruchtbarkeit der gâbe daz ist aleine dankbarkeit der gâbe, und dâ ist der geist ein wîp in der widerbernden dankbarkeit, dâ er gote widergebirt. Iesum in daz veterliche herze.
- (82) Vgl. *ibid.*; DWI, 31, 1-4
- (83) Vgl. *ibid.*; DWI, 31, 6-8
- (84) Vgl. *ibid.*; DWI, 39, 1-4
- (85) Vgl. *ibid.*; DWI, 41, 1-2
- (86) Vgl. *ibid.*; DWI, 43, 1
- (87) Vgl. *ibid.*; DWI, 43, 3-4
- (88) Vgl. *ibid.*; DWI, 43, 6
- (89) Vgl. *ibid.*; DWI, 44, 1
- (90) Vgl. *ibid.*; DWI, 44, 3
- (91) *Pr. 5b*; DWI, 90, 8: Hie ist gotes grunt min grunt und min grunt gotes grunt.
- (92) 田舎「ヒトヤノ人の人間本姓理解」トヤノヒルヤノ「観念のりす」  
『トヤノヒルヤノ』巻一〇三章「十一—十二回参照のりす」
- (93) *Pr. 5b*; DWI, 91, 7-9: Wan swer got suochet in wise, der nimet die wise und lât got, der in der wise verborgen ist. Aber swer got suochet âne wise, der nimet in, als er in im selber ist;

- (40) Vel. *Pr. 5b*: DWI, 91, 9923 この「なぜということなしに生きる」という言説はエックハルトの「始原は同時に終焉である」という「始原論」に神学的基礎を持っている。田島照久「ドイツ神秘思想における時間把握―マイスター・エックハルトの瞬間論」甚野・益田編『ヨーロッパ中世の時間意識』二〇一二年、知泉書館、一六七―一九二頁参照のこと。
- (41) *Biblia vulgaris*, Ecclesiasticus 24・23
- (42) *Pr. 21*: DWI, 358, 1-2. Daz meint, daz wir ein suh sin in uns selben und gesunder von allen, und strate unbeweget suh wir mit gote ein sin.
- (43) 田島「永遠の第一の単一なる今 (primum nunc simplex aeternitatis)―マイスター・エックハルトの永遠理解―」、『フィロソフィア』第九十八号、早稲田大学哲学会、一―二十一頁、二〇一一年参照のこと。

「私の花は美である」